

Title	留学生のための日本美術案内 : 芸術作品から読み解く日本文化
Author(s)	井面, 舞
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2012, 10, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6831
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

留学生のための日本美術案内

— 芸術作品から読み解く日本文化 —

井面 舞

【要旨】

日本文化について知ろうとするとき、日本の美術作品は必ず学ぶべき必須課題といっても過言ではないだろう。なぜなら美術作品は言語と同様に、しかし言語とは違う方法で情報を伝達するメディアの一種だからである。ある作品が「何を」「どのように」表現しているのかを注視し、そこから作品が指し示すメッセージを読みとることができれば、日本文化のさらに多様な有様を知ることができる。

しかしながら日本美術を学ぶには、読み書きの難しい固有名詞や専門用語が数多くあり、日本史の基礎的な知識が求められるため、留学生にとっては非常に困難に感じられることが予想できる。そこで筆者の担当する「日本美術研究」では、日本美術史の知識を持たず、これまであまり作品を見ることもなかった日本美術初心者を対象として、上記の困難に対するストレスをできるだけ少なくし、作品の観賞と解釈を楽しむ方法を紹介するべく試行錯誤している。なぜなら日本美術の世界の入り口に立つ留学生たちに、まずは作品の魅力、面白さを知って欲しいと願うからである。

授業内容については、現状ではパワーポイントによる作品画像の詳細な観察、観賞を行いながら日本美術の通史を紹介するという形をとっている。また授業内容を詳しく載せたハンドアウトを配布し、作品鑑賞の手助けとし、一学期中に三度に渡って近畿圏内の社寺を訪れる学外研修も行っている。

本稿は、以上に述べたような当該授業の内容について報告し、反省点および今後の課題について整理するものである。

I. はじめに

多様な日本の文化の中でも、彫刻、絵画、工芸品など今日芸術作品として扱われる分野のものは視覚に強く訴えかけるメディアであり、そこには言語で語られなかった、あるいは語ることでできなかった日本人の思想や世界観が表されている。まさに日本の文化の多彩な様相を、具体的な像として理解するのに格好の対象であろう。そうした日本美術のヴィジュアル・カルチャーとしての性格に魅力を感じ、日本美術のことをもっと知りたい、日本美術の知識を得たいと思う人は少なくないだろう。実際に当センターで筆者が担当する「日本文化研究科目 日本美術研究」を受講する留学生に授業内容に対して望むことを尋ねると、多くの学生が日本美術の知識や観賞の仕方を知りたいと答える。

しかしながら、美術作品を知り、観賞し、理解することは日本人にとってすら容易なことではない。いったい日本美術について何を知ればいいのか、作品のどこをどんなふうに見ればいいのかと悩み、自ずと美術鑑賞を敬遠する人も少なくないであろう。まして留学生の中には、日本美術をほとんど見たことがないという者もいる。もちろんある程度の日本美術の知識を持った学生もいるが、「日本美術研究」では日本美術を全く知らない留学生を対象とし、彼らが作品を理解し楽しむための最初の手掛かりを得ることを目的として授業を行っている。

本稿では実際の授業をどのような形式で行っているか、そして具体的な作品について何を解説し、どのようにして学生の理解を促しているかを紹介することとする。

II. 授業の形式

授業は通常の時間割の中で行う通常授業と、月に一回、休日を利用して実施している学外研修授業の2形態で構成されている。学外研修授業は参加必須で、欠席した場合は成績評価の際に減点する。

(1) 通常授業の概要

当該授業では日本美術の流れを概観できるように、作品の各論ではなく日本美術史の通史を紹介している。全体の流れとしては、基本的に秋学期の1 Semester (15回) で飛鳥時代から平安時代までの美術作品を時代の流れに沿って紹介し、春学期では鎌倉時代から江戸時代までを取り上げている。春学期の内容は秋学期のもの続きとなるが、秋学期に受講していない留学生に配慮して基礎的な用語・時代背景の解説を行っている。

また、一回の授業の進め方としては、毎回内容に即したハンドアウトを配布し、パワーポイントで作品を一つずつ確認しながら解説を行うという形をとっている。(図1・2(次ページ))ハンドアウトには授業内容をかなり詳細に載せており、ルビも多用している。さらに専門用語はできるだけ平易な別の日本語に置き換え、やむを得ないものについてはほとんどに用語説明欄を設けている。これらの配慮は固有名詞に読み書きの困難なものが多いことと、口頭ではわかりにくい専門用語などが頻繁に出てくるためである。また、授業中はパワーポイントによる作品の画像に集中してもらうため、板書やメモを取る作業を減らす目的もある。さらに、ハンドアウトにパワーポイントで使用した画像と同じものを載せ、授業後に作品を忘れてしまうことのないよう配慮している。

<救世観音像の特徴>

- ・一葉の糸から彫り出している。⇒「一本盛り」という特徴。
- ・ブロンズの「髪」を細にかぶっている。
- ・作られた当初は像の坐像は蓋蓋だった。
- ⇒像の表面に蓋蓋をとりつける蓋蓋神という技術で作られていた。
- ア蓋蓋・・・蓋をだいて、うつし紙のようにのはしたもの。

<法隆寺金堂釈迦三尊像と似ているところ>

- ①肩の形をなまめに斜切る肩袈裟
- ②襟のあたりで交差する天衣
- ③下半身の両側で左右に広がる天衣
- ④肩にかかる髪のかぶり

10

<法隆寺金堂釈迦三尊像とちがう点>

- ①髪が長く、のびやかな下半身
- ②ひろい肩・くびれた鎖・大きくふくらんだ鎖
- ③肩から見た形→頭と下腹をやや前に出した0等型の姿

→新羅風の岡山神社に
つたわるブロンズの観音像
(7世紀、朝鮮半島で
つくられた)によく似ている。

1肩から見た救世観音像

<顔の表現の特徴>

- ・色、目が大きく、唇は細く、髪は長く、顔は丸い。
- ⇒救世観音像は安土法隆寺三尊像と同じ時代(554～628)に作られた仏像だと考えられる。
- ・左右対称性⇒像の中心で半分に分けると、その左右が同じ形になる。
- ⇒法隆寺法堂釈迦三尊像にも共通した特徴

11

図1. 通常授業で配布しているハンドアウト

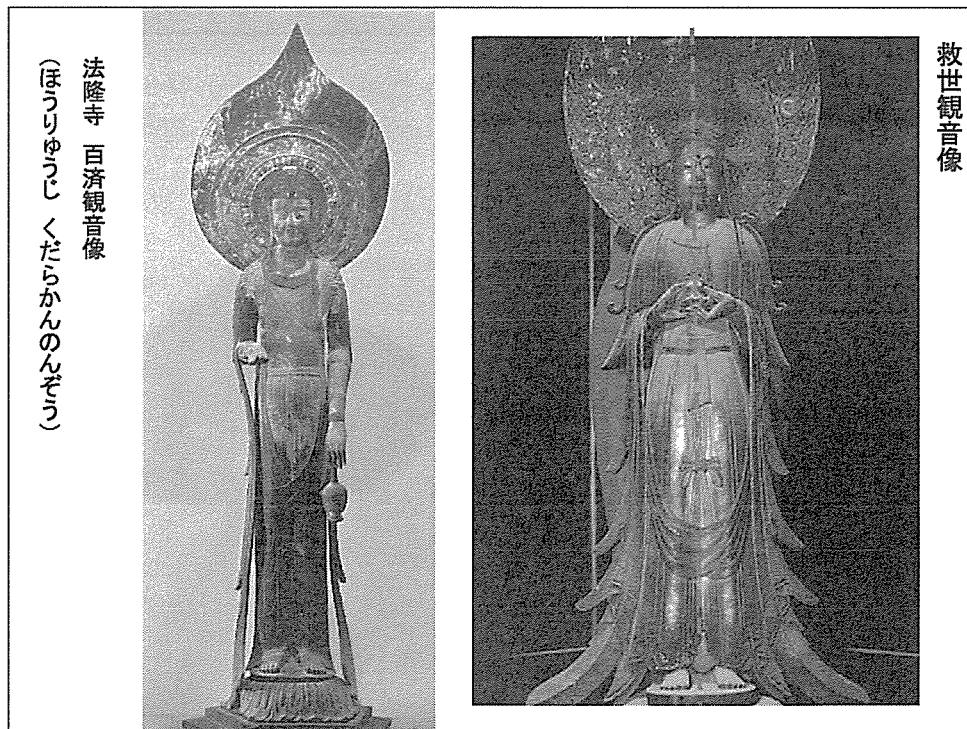


図2. 通常授業で使用しているパワーポイント

作品画像を見る時は、その作品の形状、色、線の特徴を細かく指摘し、同様のやり方で同時代の複数の作品を解説する。このことによって、学生にある時代の美術作品に共通して現れる様式について具体的に実感してもらえようことを狙っている。特に時代的特徴が顕著に表れている作品については、その印象や色、形などについて学生に意見を求めている。学生からは作品に対して抱いた率直な感想（優しそう、穏やか、強そう、怖い、等）が聞かれ、中にはこちらから問うていなくとも自主的に発言する学生もいる。これは作品鑑賞の第一段階として重要なプロセスであり、さらに抽象的な作品への印象を日本語にして伝えようとする姿勢、授業への積極性などの点においても高く評価できることである。

また、巻子や掛軸、屏風、襖絵といった作品の形式も、そこに描かれる絵画の鑑賞に大きな影響を及ぼす。そこで、それぞれの絵画形式と絵の影響関係を理解してもらうため、絵巻と掛軸についてはレプリカを実際に授業中に学生が扱う機会を設けている。（次ページ図3）屏風、襖絵に関しては実物大のレプリカを授業で扱うことはできないため、パワーポイントでの立体画像で実際に設えられた時の様子を確認している。（次ページ図4）

作品の解説に際しては、先行研究の解釈を紹介したりしつつ進めているが、理解するのに多くの専門的知識を要するものなどは選ばず、作品の様式や形状分析など見た目の特徴から実感できる例を紹介している。

また、日本美術史を理解するうえで基本的な日本史の知識が必要とされるが、日本史を全く学んだことのない学生も少なくないのが現状である。そこで各時代ごとに作品紹介に入る前に、作品に影響を及ぼすことの多い政治権力の在り処と仏教思想に焦点をあててごく簡単な説明を行っている。授業全体のバランスを考えると歴史背景にあまり時間を割けないので、やむを得ず補足的な説明に留まっている。（5ページ図5）

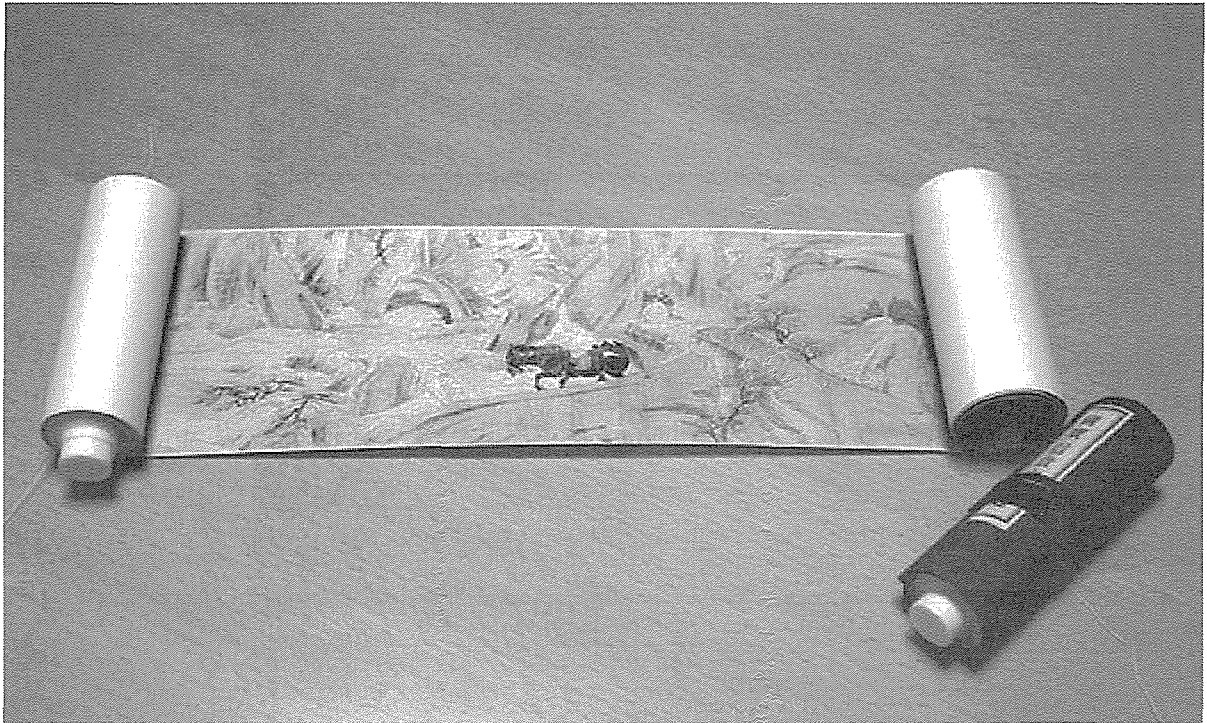


図3. 授業で使用したレプリカの絵巻

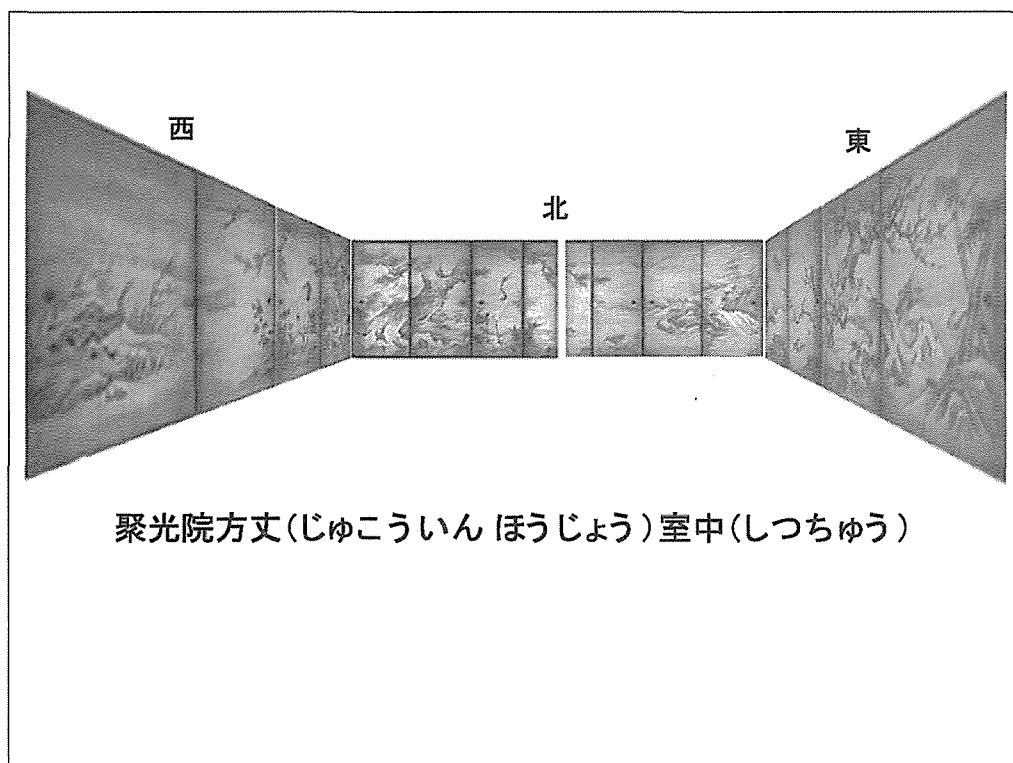


図4. 襖絵の立体図 (パワーポイント)

なんぼくちようじだい むろまちじだい
南北朝時代から室町時代の美術

かまくらばくふ めつぼう なんぼくちようじだい
1. 鎌倉幕府の滅亡から南北朝時代へ

1246年(鎌倉時代末) : 天皇家は^{たいやうじ}大覚寺統と^{ていめい}持明院統の二つに分かれ、争いはじめた。

↓
1333年 : ^{たいやうじ}大覚寺統の^{ごうらんてんわう}後醍醐天皇が全国の武士に^{かまくら}鎌倉幕府を滅ぼそうと呼びかけ、^{たりしむらじ}足利尊氏の働きでついに^{かまくら}鎌倉幕府は滅び、^{ごうらんてんわう}後醍醐天皇による新しい政治が始まった。

*しかし^{せいじ}政治の混乱は続いた。
 さらに、^{ごうらんてんわう}醍醐天皇の^{てんわう}天皇中心の政治は武士たちの^{ふまん}不満と^{そごう}抵抗をひきおこした。

↓
 1335年 : ^{たりしむらじ}足利尊氏が^{ごうらんてんわう}後醍醐天皇から離れて対立。

↓
 1336年 : ^{たりしむらじ}足利尊氏は^{ていめい}持明院統の^{きやうめい}光明天皇を^{せいじ}正統な天皇とし、^{きやう}京都に新しい幕府をひらく宣言をした。
^{ごうらんてんわう}醍醐天皇は^{きやう}京都から逃げて^{さうら}奈良へ行き、自分が^{せいじ}正統な天皇だと主張した。

*^{ごうらんてんわう}醍醐天皇の勢力を^{なんちゆう}南朝と呼び、^{きやう}京都の^{たりしむらじ}足利尊氏の勢力を^{ほくちゆう}北朝と呼ぶ。
 南朝と北朝はこの後 57 年も争い続けた。⇒この 57 年を^{なんぼくちゆう}南北朝時代と呼ぶ。

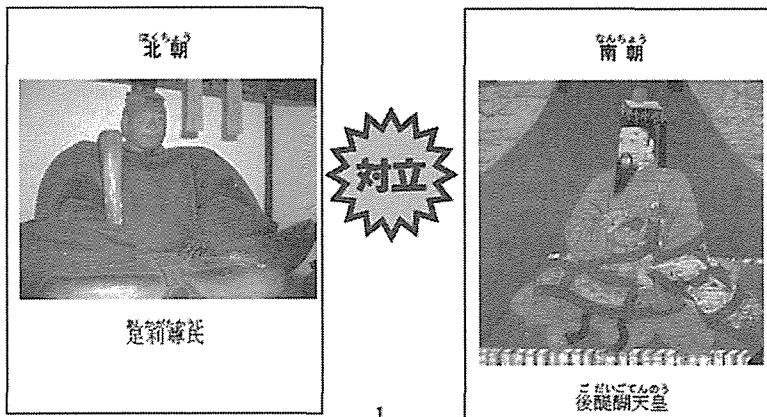


図 5. ハンドアウトの歴史背景説明部分 一例

(2) 学外研修授業の概要

学外研修授業では、近畿圏内の社寺あるいは美術館・博物館を訪れて留学生に彫刻・美術工芸・建築などの日本の美術作品を実際に鑑賞する機会を提供する。1セメスターのうち3回実施し、基本的には授業の進行状況に即して行き先を決定している。

この授業の目的は、写真やデジタル画像による複製では再現できない実際の作品の大きさ・質感・色彩などを実感することで、日本美術を視る力を養うことである。また日本の彫刻・絵画の多くはそれらの置かれる建築空間内での配置のされ方も鑑賞の重要なポイントであり、特に社寺での現地見学は作品理解の大きな手助けとなる。そのため、学外研修授業では美術館・博物館よりは神社仏閣で行うことのほうが多い。実際、通常授業中では学生の反応の薄かった作品でも、見学地で実物を前にすると作品についての質問や意見が活発に出ることが多く、現地見学が学生の関心・意欲を大いに喚起していることがうかがえる。さらに、最終的な成績評

価のためのレポートに授業の感想を書き添えてもらうようにしているのだが、そこからは学外研修についての記述が多くみられる。特に平等院鳳凰堂は常に最も人気が高く、極楽浄土を再現した演出的な庭園と建築が印象深かったという意見がよく見られる。なかには「初めて10円玉の表のデザインが何なのか意識した」という意見や、「宇治の山の景色が美しかった」（鳳凰堂の壁画にも宇治の景色が描かれている）といった感想もあり、実際に現地を訪れることによって学生たちが通常授業だけでは得られなかった興味をそれぞれの観点で抱いていることがわかる。

以下に2011年度秋学期の実施スケジュールと授業進行を紹介しておく。

学外研修授業	通常授業
第一回 実施日：2011年11月27日 見学地：奈良 東大寺・興福寺	11月 飛鳥時代～白鳳時代の美術
第二回 実施日：2011年12月18日 見学地：奈良 法隆寺	12月 天平時代～平安時代前期の美術
第三回 実施日：2012年1月21日 見学地：京都 平等院	1月 平安時代中期～平安時代後期の美術

11月、1月に行った学外研修では実施時期に行った授業で取り扱った作品に合わせて見学地を設定した。12月の学外研修では当初、平安時代前期の内容に合わせて京都・東寺の見学を計画していたが、学生からの希望があったため既に11月に授業で紹介済みだった法隆寺に行くことにした。基本的に、見学地は実施時期の授業内容に合わせて決定するようにしているが、学生から要望があれば彼らの興味・関心を優先してそれに応えることにしている。

また、通常授業内で説明が不足している見学地については、現地で補足資料を配布することもある。(次ページ図6)

(3) 成績評価

成績は、出席60% (学外研修参加も含む)、レポート提出40%の割合で評価している。出席点については授業参加の意欲、態度も加味して最終的な評価を決定する。また授業内での課題提出はなく、試験も行わない代わりに、学期末にレポート提出を課している。これは、作品に関する情報や専門用語を問うよりも、作品に対する記述や感想から学生の作品理解の度合いを確認したいためである。テーマについては、学生からなるべく多様な観点・解釈を引き出すため、具体的な内容の指定はせず「授業で扱った作品について自由に記述せよ」としている。

Ⅲ. 授業内容の具体例

本章では「日本美術研究」の通常授業において、実際にどのような方法で作品を鑑賞し解釈しているのかについて具体的な例を挙げながら述べる。作品の解釈はさまざまな観点から行うことができるが、ここでは12世紀末の絵画作品から当時の人々の関心の在り処を読み解いた事例を紹介する。

なお、以下に述べる授業内容の概略は、今回の報告のために講義用原稿を再編集したもので

ほうりゅうじ れきし
法隆寺の歴史

法隆寺は、もとは斑鳩寺という寺で、606年から607年頃に聖徳太子が自分の宮殿であった斑鳩宮の側に建てた、日本で最初に古い寺格納の寺院である。

また、現在に残っている世界最古の木造建築として、ユネスコ世界遺産に登録されている。

<西院伽藍と東院伽藍>

寺全体は西院と東院の2つのエリアに分かれている。

- 西院…中門と伽藍で囲まれた中に金堂、天護堂、五重塔など多くの国宝の建築がある。
- 止利山門のつくった聖母堂は国宝にある。
- 西院のエリアや建物をまとめて西院伽藍と呼んだりする。
- また、できた時期は東院よりも古い。
- 東院…西院より新しく、聖徳太子とその一族が住んでいた斑鳩宮の跡地に建てられた。彩色壁画のある聖観を中心として法華堂、孔雀、結界・舍利殿などがある。
- 東院の建物をまとめて東院伽藍と呼ぶ。



<西院伽藍と若草伽藍>

はじめ606年~607年に建てられた斑鳩寺(法隆寺)は、570年に火事で焼失したという記録が残っている。→現在の西院伽藍は後になって建て直されたもの?

↓

1939年に若草伽藍が拝観されたことで、現在の西院伽藍は後の時代のものであることが明らかになった。

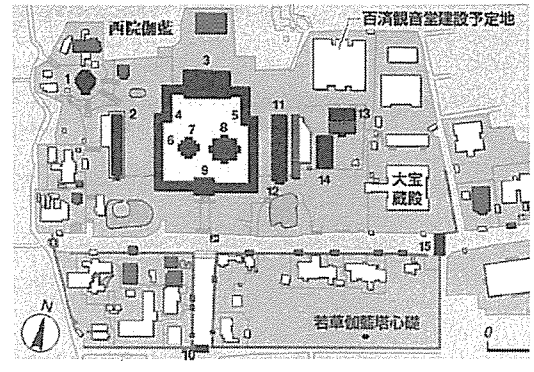


図6. 2011年度12月学外研修で配布した資料

あり、実際の授業においてはより平易な言葉で解説している。

(1) 絵画から読みとる現実世界への関心 I 一庶民生活へのまなざし一

芸術作品は単に美しいもの、目に快いというだけのものではない。そこには常に作品に関わった人々の思想、関心が表されている。作品に関わった人というのは、作品の注文主であり、作品を作った制作者であり、作品を鑑賞した受容者などである。なかでも古代から近世までの日本の美術の伝統の中では、圧倒的に注文主が作品に与える影響力は大きい。彼らは言わばプロデューサーや制作監督として作品のコーディネートを行っていたのである。当然、作品には監督である注文主の考えや好みが強くと強く反映されることになる。

例えば12世紀を代表する絵巻「伴大納言絵詞」(国宝、出光美術館)、「信貴山縁起絵巻」(国宝、朝護孫子寺蔵)はその良い例である。両者とも力強く勢いのある線や、連続性と変化のある画面構成を特徴とする。特に横長の画面を最大限に生かした物語展開は、長い絵巻の歴史の中でも出色のものである。授業ではそのことを学生に実感してもらうため、「信貴山縁起」では一巻の全図、「伴大納言絵詞」では全三巻の全図を物語内容に合わせてディスプレイ上でスクロールさせながら解説するという形式をとっている。(次ページ図7・8)

しかしこれらの作品についてさらに注目すべきは、多くの庶民の姿が克明に描かれている点である。これは作品解釈に関わる重要なポイントである。絵は当時の庶民の家の様子や、どんな着物を着ていたかがはっきりとわかるほど丁寧に描きだしているのであり、その熱心な描写には庶民の生活、実態に対する強い注文主の関心がみてとれる。



図7.「信貴山縁起絵巻」第一巻全図のうち部分



図8.「伴大納言絵詞」パワーポイント

この当時、絵巻の注文主はもっぱら天皇や貴族などであり、彼らは自分たちの知らない一般の庶民たちの姿に強い興味をもっていたのである。仏画に見られるような優美で華麗な貴族趣味がある一方で、庶民生活といった優雅ならざるものへの関心が同時に存在しているわけである。そして、その汚れた庶民の姿は、仏画に描かれる神聖な仏や極楽浄土といった理想的世界のものではない、いわば卑俗な現実世界のそのものである。12世紀の貴族たちの意識に、決して清浄とは言えない現実世界に向けられた関心があったことがうかがえる。

(2) 絵画から読みとる現実世界への関心Ⅱ —醜いもの、恐ろしいものへのまなざし—

「地獄草紙」(12世紀後半、国宝、奈良国立博物館)は、亡者が生前に犯した罪の種類別にいくつかの地獄の様子を描いたものである。(次ページ図9) どの地獄も暗い灰色の背景が画面のおぞましさを演出し、責苦を受ける亡者の苦しむ様を描くが、いっぽうで不気味な獄卒や虫の表情にはブラック・ユーモアともいべき皮肉なおかしみがあり、見る人に残酷な印象をあまり与えない。

さらには、餓鬼道に堕ち、首や手足が紐のように細くお腹が膨れ上がった姿の餓鬼として罪に苦しむ呼ばれる鬼を描いた「餓鬼草紙」もある。(次ページ図10) 餓鬼のように、やせ細って



図9. 「地獄草紙」パワーポイント



図10. 東博本「餓鬼草紙」パワーポイント

お腹ばかりが突き出た人間の姿は、当時飢饉の時にはよく見られたものと思われる。この作品では餓鬼道に堕ちた人の姿をそういった人々の姿に重ね合わせて、実際には目に見えない餓鬼の姿や生態を描きだしているのである。

特に東京国立博物館本(12世紀後半、国宝、東京国立博物館)には便所、出産の場面、墓地などに現れた餓鬼の姿が描かれている。これらの場面の描写には、餓鬼の不気味さやグロテスクな様子もさることながら、人々の生活の裏の側面、すなわち出産や排便、棺桶の中といった普

段目にする事のない場面の不潔で醜い様子が、意図的に赤裸々に描かれている。

また、同様の関心が現れた例として「病草紙」（12世紀後半、国宝、京都国立博物館・他蔵）も、その代表としてあげられる。（図11）これは現実世界の様々な病気の症例を集めて絵にした、病気の百科事典ともいうべき内容のものである。描かれている病気はさまざまで、眼の病気の男の話（白内障）、霍乱（吐くこと）の女、体の震える風病の男（脳性麻痺？）、二形、歯がゆるぐ男、背骨の曲がった男、顔にあざのある女、肥満の女、幻覚など多くの病気が描かれている。

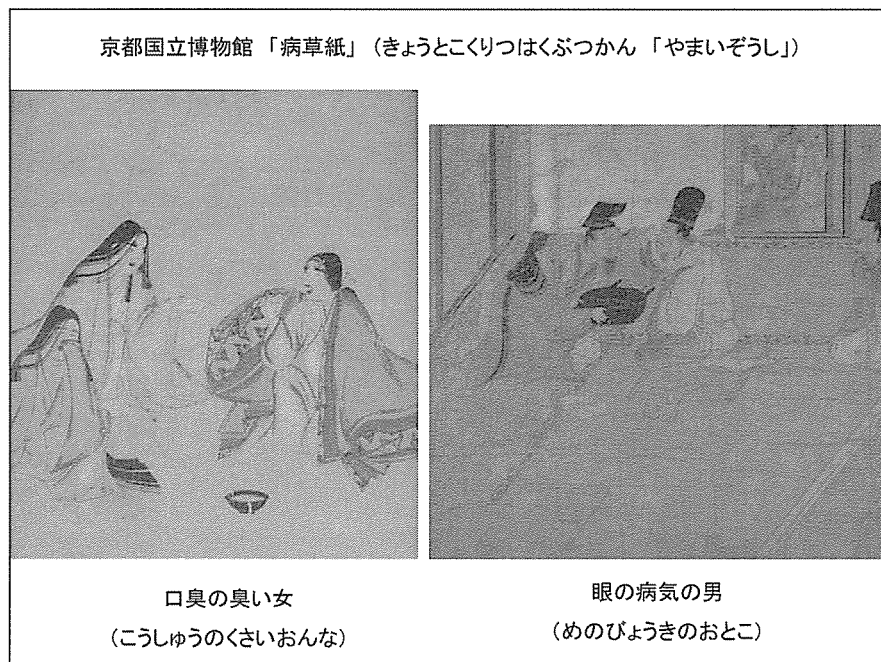


図11. 「病草紙」パワーポイント

この「病草紙」の特徴の一つとして、病人のそばでその人を指さし笑っている人が描かれているという点があげられる。つまり病人を嘲り笑いものにしてしているのである。なぜこのような人が描かれるのか、はっきりとした理由はわかっていないが、しかしこの作品にみられる露骨であけっぴろげな描写には、病気の症例に対する好奇心というものが強く感じられる。

以上に挙げた「地獄草紙」、「餓鬼草紙」、「病草紙」には、地獄や餓鬼といった死後の苦しみと、病に侵される現世の苦しみが描かれていた。どちらも当時の貴族が身近に感じていた恐怖であり、それ故これらの絵画にはあえて恐怖の様態を見る者に見せつけ、こうならないように功德を積むよう警告する宗教的メッセージが込められているとする解釈もある。

しかしながら、恐ろしい地獄の鬼をどこかユーモラスに描く、病にかかった人を絵の中で嘲るといった姿勢からは、醜いもの、残酷なものをどこか突き放したような客観的な立場から見るといふ、この絵を当時見ていた人々のまなざしが感じられる。それは、通常嫌われるもの、遠ざけられるようなものを恐れる一方で、それに相反して醜いものに対する好奇心に満ちたまなざしである。そして、ここに見える好奇心は言い換えれば、現実の世界の醜い部分への関心だと言える。つまりそれこそが、現実世界の汚い部分をあえて見たいという欲求なのである。これらの作品には、貴族たちの意識が卑俗な庶民生活からさらに一步踏み込んで、現実のことさらに醜い側面に向けられていることが見て取れる。

以上のように筆者担当の授業では、美術作品の制作背景や色・形といった視覚的情報の解説だけでなく、作品から当時の人々の思想や興味のあり方を読み解く方法についても紹介することになっている。美術史入門としては少し難しい内容になることもあるが、大学生を対象とした授業であること、そして日本の文化の一面を紹介する授業であることを考慮して作品解釈に重きを置いている。学生から聞かれる授業全体についての感想からも、「源氏物語絵巻」などの物語絵画の内容解釈や上記の作品の解釈が人気であることがうかがえた。

IV. 結び

今回の報告では、筆者が日本語日本文化教育センターにおいて担当している「日本美術研究」の授業内容を紹介した。授業の中ではなるべく平易な語彙を使うようにしているが、作品の特徴を解説するときなどはどうしても留学生が耳慣れないであろう形容詞や熟語を使わざるを得ない時がある。そんな時は、その語句を板書し、各自で調べてもらうことで授業を進めているが、こちらの伝えんとする作品の抽象的な雰囲気や正しく理解されているかどうかには不安が残る。わからないことがあれば、解説している最中でも遠慮なく質問するよう指示しているが、実際にはなかなか質問のタイミングが計りがたいものであると想像できる。

また授業中、受講生のほとんどはパワーポイント画像に集中し、時には作品の印象を述べるなど作品観賞に強い興味を示していることが感じられる。しかし、常に教員と学生の間でのコミュニケーションに終始してしまうことと、発言する学生が固定されてきてしまうことに問題を感じるのも事実である。できれば、学生同士の意見交換が行えればよりよいのだが、特に発言のない学生に関しては語学力や作品を見る力の問題もあるかもしれないが、何か的外れで間違った意見を言うことへの恐れが大きな妨げとなっているように思われる。

これらの問題はともにクラス内でのコミュニケーションに関わるものであると言える。毎年、受講生の数がさほど多いわけではないので、授業中に遠慮なく自由に発言できる雰囲気を作ることができれば、より実りある授業となるだろう。とは言え、そのような状態を実現するのは容易なことではない。受講生の日本語能力に即しながら個々人の発言する機会を増やしていくことが求められるだろう。今後は学生間でのコミュニケーションを促すことも視野に入れつつ、授業内容の改善を図りたいと思う。

参考文献

- ・『フィクションとしての絵画』（千野香織・西和夫著、ペリかん社、1991年5月1日）
- ・『10-13世紀の美術 王朝美の世界』（岩波日本美術の流れ3、千野香織著、岩波書店、1993年7月3日）
- ・『絵画のメディア学—アトリエからのメッセージ』（島本澁・岸文和編、昭和堂、1998年5月30日）
- ・『日本美術の歴史』（辻惟雄著、東京大学出版会、2005年12月9日）

（いのも まい 本センター非常勤講師）